

日付:2016年8月7日／聖書:列王記上17:1～16

説教:「主は生きておられる」

今年も8月を迎える。8月は、日本にとって平和を覚える月でもあります。6日の「広島原爆の日」、9日の「長崎原爆の日」、そして15日の「敗戦記念日」と、今年71年目を迎えるが……。ただ、沖縄に関して言えば、この8月は22日の学童疎開船「対馬丸」が米軍潜水艦の魚雷を受けて、多くの一般市民が犠牲になった月でもある。1944年8月22日で、今年72年目。学童783人を含むおよそ1,500人が犠牲になった。城間先生の妹さんの城間孝子さんも含まれている。沖縄戦の悲劇は、幼い子の犠牲から始まったことを忘れてはならない。

もう一つ付け加えたい。今週の13日は、沖縄国際大学に普天間基地所属の米軍ヘリが墜落した日。2004年の出来事で今年12年目になる。沖縄では未だ、戦争が続いているかのような状況があること、日本本土とは違う、ヤマトとは違う状況がある。

預言者エリヤは、アハブ王に物申す。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる」と。それはアハブ王が主なる神を拝まず、バアル神(偶像)を拝するようになったからである。具体的に言うならば、王は自国を強化するために、軍事力を上げて行く。他国よりも力をつけ安定をはかろうとした。そのためには他国から「嫁」をもらい、宗教だって取り入れる。強い国にするためには手段を選ばなかった。軍備を増強した北イスラエルは、見た目には安定していた。しかしエリヤはこの国の亡びを見るのである。ゆえに王に物申す。誰一人彼を支える者はいないにもかかわらず……。いや、主なる神のみに信頼しつつ……。

このあと主なる神は、エリヤに身を隠すようにすすめ、カラスを用いて行く。これはどういうことか？ カラスがパンと肉を運んでくるという奇妙なことが記されている。カラスはあまり良いイメージは無い。聖書の中でもカラスは忌み嫌われたものとして扱われている。平和的象徴であるハトならまだしも何故カラスなのか？ 8節以下には、今度は、カラスに変わって「やもめ」がエリヤを養うと出てくる。やもめは夫を失った者で、当時は、生きる術を無くした者……というレッテルを張られた。実際に、このやもめは、子どもと二人暮らしで、非常に貧しい生活をしていた。カラスといい、やもめといい……。人を養うには、非常に厳しいであろう立場のものが、用いられている。それは、何故なのか？

これは先ほどのアハブ王とは対照的にあることを、ここに表している。アハブ王は、最強の軍備を整える事によって、自国を養おうとするのに対して、主なる神は、この世的には忌み嫌われるカラスや、貧しいやもめを通して養おうとしている。このメッセージは、非常に感慨深いものではないか。軍備を強化することが本当の平和に繋がることなのか？ 私たちはまた聖書から、歴史からそのことを考えて行きたい。生きておられる主の言葉を常に傾聴しながら、この8月もまた、真の平和を求めつつ歩ませて頂こう。(神谷)